

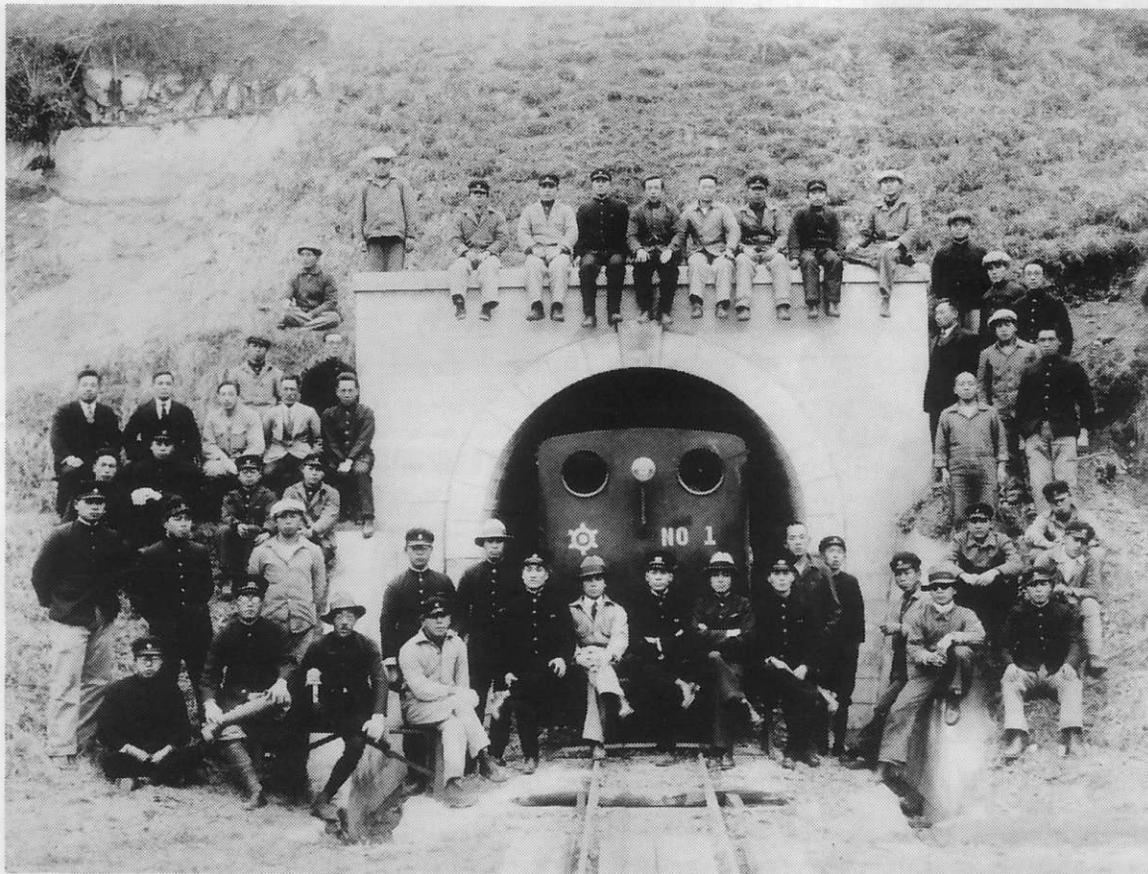
資料館だより

第 21 号

平成 6 年 8 月 1 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町5-21-1 TEL 0425(60)6620



1号隧道（横田トンネル）での記念写真（昭和6年頃）

〈秋山 守氏提供〉

特別展

「村山を通った^{けいべんてつどう}軽便鉄道」

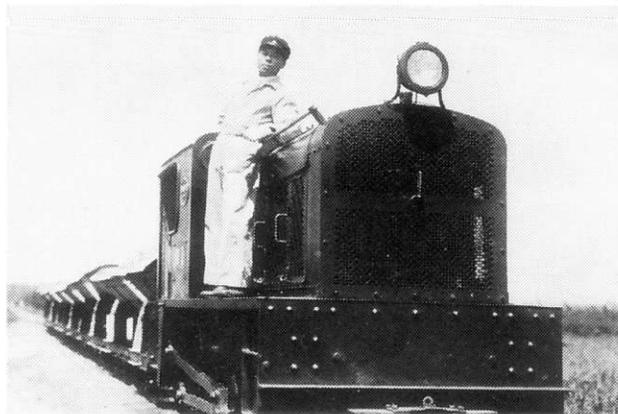
—— えっ!! わが町にも鉄道があったの? ——

期間 平成 6 年 8 月 7 日 ~ 9 月 25 日

「村山を通った軽便鉄道」

武蔵村山市の野山北公園自転車道を通ったことがあるでしょうか。狭山丘陵にかかる部分では赤坂・御獄・赤堀・横田などのトンネルを抜け、平地部では西南方面へほぼ直線的に延びる道です。この自転車道の下には羽村取水口から村山貯水池、山口貯水池へ水を送る導水管が埋設されています。この自転車道こそ昭和初期に山口貯水池建設工事に活躍した軽便鉄道（仮称：「羽村—山口線」）の線路跡なのです。この工事には当時の最新鋭のディーゼル機関車も大量に導入されており、ナベトロ（断面が三角形のトロッコ）を引く機関車の姿が村山村（武蔵村山市の前身）でも見ることができたのです。

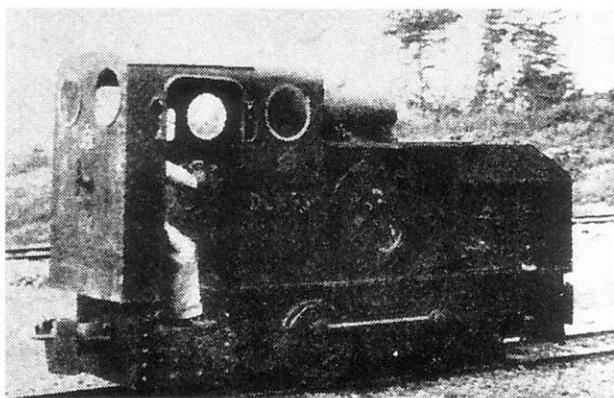
今でこそ、武蔵村山市は鉄道の通らないことで（悪？）名を馳せてしまいましたが、かつて市内にも工事用軌道ではあっても鉄道があったのです。そして、貯水池建設に携わった多くの人々、トロッコで遊んだ多くの子供達の姿があったのです。今なお自転車道に残るトンネルこそ当時の様子を伝える貴重な遺跡なのです。



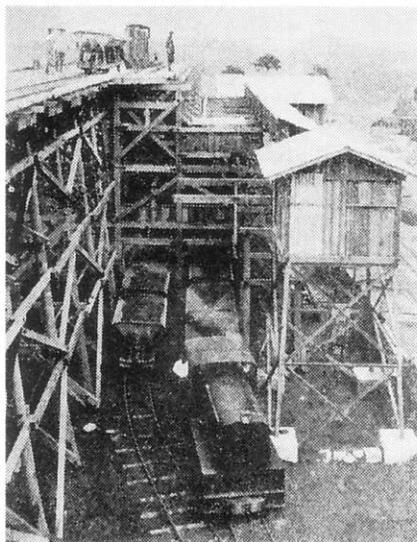
ドイツ製7 tディーゼル機関車（昭和6年）
〈秋山 守氏提供〉



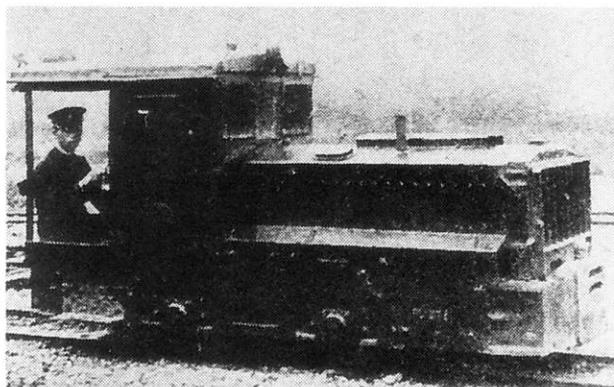
自転車道に残る旧1号隧道（横田トンネル）



ドイツ製5 tディーゼル機関車
〈昭和9年発行「山口貯水池」より〉



残堀砕石場（宿地区）の様子
〈昭和9年発行「山口貯水池」より〉



プリマウス製4.5 tガソリン機関車
〈昭和9年発行「山口貯水池」より〉

武蔵村山における月待信仰と遺物について

武蔵村山市文化財保護審議会委員 村山美春

1 はじめに

「月待」という言葉が使われなくなり、人々の生活から遠ざかって久しい。高齢の吾人であっても「地域の歴史や民俗に深い関心を持たない限り、わからなくて当然」といわれ、知らなければ知らないままで今日に及んだわけである。

いまさら、「月待」の定義は示すまでもない。「月待」は言葉どおり月を待つことであり、特定の月齢の晩に月の出を待ちながら大勢（時には小集団であっても）で決められた場所において飲食を共にする行事であった。この集合体をのちに講と呼んだことは、他の何々講の名称で呼ばれる団体と同様である。神や仏を祭祀して催される講であってみれば、月待の講にも神や仏が存在し、祭祀されたことはいままでもない。月待が「月まつり」の意味であるといわれるのは定説で、それでは月の神は何かとなると、神道では月読命を祀り、仏教では月天子であるとする。この月天子とは勢至菩薩の変身だといわれ、月の崇拜、月の信仰には必

ずといてよいほど勢至菩薩が登場するのである。

月待の月の出を待つ行事で、それが仏教系の盛んな供養と行法と結びついて月待供養の語句が用いられると、その供養のしるしとして、狭山丘陵・村山の地でも中世以来、供養塔や供養記念造型物を遺すこととなる。それが時には月待供養の五輪塔であり、月待供養の板碑（青石塔婆）であり、刻像塔もあれば文字塔でもあった。これら各々種々の石造物を、やがては江戸時代の物まで含め、それぞれの地域で見ることができるのである。

武蔵村山市域においては、この月待信仰やそれに伴う月待供養の遺物があるかどうか。それは吾人がつとに関心を寄せ、耳目を属し、その遺物の発見に心を用いてきたことであった。その労が報いられたわけではあるまいが、ここにピカ一の月待信仰の証拠遺物を紹介することができることは最大の喜びである。

2 中世月待供養五輪塔と板碑

昭和39年9月頃、その月待五輪塔（正しく記すならば「月待五輪塔の地輪」）は当時の村山町中藤の堂山、通称「ジョウド山」（本来は十王堂のある山という意味が浄土山の意味にとられている）の山頂付近で発見された。その時、郷土研究の嚆矢渡辺美和翁は他界されて間もない頃で、実見はもちろん何故堂山の地に月待五輪が存在するのか等、一切伺えず誠に残念であった。その地輪の発見場所は墓地ではなく、草叢に取り残された墓石の台石のように思える形で、一つぽつんと置かれていた。この地輪はそれ以前、かなり損傷を受けるほど転がされ、雨露風雪にさらされ、拓本をとってはじめて銘文も判読できた。一部不明なところもあ

たが、左のように当時のノートに記されている。

寛正6年は西暦1465年、将軍は足利義政、その正月には延暦寺の衆徒が蓮如上人の東山大谷の坊舎を襲っている。この年より4年前、寛正2年には正月から食糧不足が全国的に深刻な情勢をもたらし、2月に入るとその窮状は頂点に達する大飢饉であった。上方がこの状態であるのに、ここ狭山丘陵の一角、村山の里はどうであったか。農村を支える農民百姓衆の生活が想像できるところである。そのような時、世情不安定の毎日を送る人々がたとえどうあろうとも、自分達の信仰と心のゆとりの中から立派に月待供養をやり遂げ、その証しとして供養塔、即ち五輪塔を造立したのである。惜しいことに地輪は残ったけれども水輪から上部分がまったく発見できなかった。

このことについて私見を披露しておく。昭和33年、古老巡回聞取記録の谷ッ地区座談会での話として「ころがし穴、70年位前、元浄土の中段辺に深さ6尺、1間四方の穴があって古い墓石があった。犬や猫を捨てたものであるが、その前はもっと深かったものと思わ

二	寛	一	月
月	正	31	結
□	六	衆	供
日	年		養
	酉 乙	白 敬	

れる。古老から聞いた伝説によると、昔、60歳以上の老人が捨てられたという説がある。」(原文どおり)と掲載されている。この談話は多分渡辺翁の発言であろう。恐らくこの穴は月待五輪塔の水輪から上をはじめ、他に建てられていた古墓石、古石塔類を呑み込んでのち次第に埋められたと考えられる。渡辺翁はおおよそその位置は教示してくれたが、平成の今となってはもう発掘の手段は到底取り得ない。

銘文についてであるが、「月待供養」の4文字は拓本でなくとも見られる。一結衆とは信仰目的のために特定の数で集団をつくり行事することであり、このほかに人数を示す文字が無いので、一結衆の人員は不明である。「敬白」は「うやまい申す」というきまり文句。中央の^{けいはく}五はアで、五輪の各輪に配される五大種子「キャ・カ・ラ・バ・ア」の最下部のものである。次が紀年銘で「寛正六年乙酉 二月□日」で結ばれている。この不明の箇所は判然としない。見方によっては「吉」と読めそうである。しかし、この寛正年代、果して吉日なる用語が用いられたかどうか。この点皆目わからないので□とした。

月待供養は宗教上の儀式として、また民俗行事として、毎月23日と日を決め、その23日の夜の月輪を礼拝することが月待である。関東では二十三夜待と呼んでいる。普通、月待の塔は「二十三夜塔」と呼ばれる石造物で、村山地方では皆無であろうが、江戸期に入って全国的に広まった二十三夜信仰の結果、各地に多く遺されている。このほか十三夜塔にはじまり、二十九夜塔に至るまでであるという。本当は、この中藤堂山の月待五輪塔も二月二十三日の二十三夜待のまつりであったと思う。銘文の方も或いは廿三日と読みたいところではある。これら不明の点は今後の研究課題として譲ることとする。

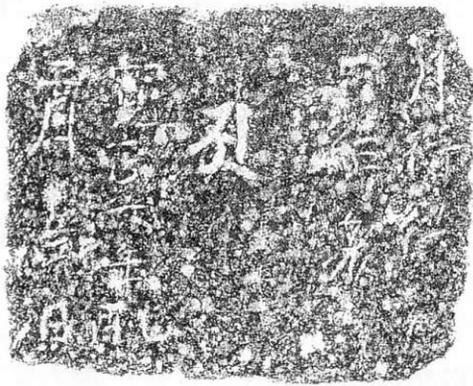
それでは、この月待供養五輪塔は一体どこに最初建てられたものであろうか。このことをもう一度考えてみたい。堂山については先に触れたが、中藤の中でも十王堂の山(ジュウオウドウ→ジュオドウ→ジョウドと変化しジョウド山ともいう)堂山は昔、丸山とも呼ばれていた。これは真福寺・屋敷山の東に続く丘の総称として呼ばれていたもので、月の名所として人々に親しまれていた山であった。この丸山のことは本稿の4章「丸山の秋月」で述べるとして、実に月と月待信仰とが一体となった舞台。これが堂山即丸山である。

当然のことながらこの舞台を背景に繰り広げられたのが中世中藤の人々によって行われた月待供養であった。そして、この土地風土と逞しい農民衆の力が一致して月待行事をやり遂げたのであった。

これに加えて、ちょうど堂山の直ぐ東を南北に抜けている一本の古道がある。鎌倉街道として土地に伝えられている古道である。けれども、寛正6年、時代は中世室町期に入って久しい頃、すでにこの古鎌倉街道も往年の面影はなくなっていたと思われる。恐らく寂れた薄の覆う細道であったろうが、それでも昔の官道は官道、道の形はなお存したであろう。この道が北から向かって十王堂の下、竹ノ沢の井戸(大多羅法師の井戸の一つ)あたりで一気に丘腹を登り、南は神明ヶ谷戸の西端に降り鎌倉を指す。この西谷の所に古くから尼寺があったという。寺は比丘尼寺と呼び、ほかに伝承はないものの石畑の比丘尼平(鎌倉期にあたる徳治三年銘の板碑発掘の所、伝説が残る)と起源を同じくするものであろうか。

この比丘尼寺の跡付近から昭和41年板碑破片が発見された。それには「□繫禪尼三月十日」とあり、年号はないが唯一の遺物である。これが直接、月待供養五輪塔ならびにその造立地点と関係はないとしても、この堂山の地そのものが古い場所であることには違はなく、古道、古尼寺など見逃せないことであろうから記述しておく。

次に月待供養の五輪塔地輪に続いて注目されることがある。それは、真福寺に保存されている月待(と思われる)板碑のことである。この板碑は何時の頃からか中藤真福寺に伝承し、大切にされてきた。板碑は上半分で、紀年銘などのある下半分がないのが惜しまれる。その全容は資料館だより第5号の表紙写真で紹介されている。同紙によれば、「・・・画像板碑は、阿弥陀如来が念仏行者の死を迎えに来る図であるが・・・」と見えるが、阿弥陀如来の線刻には月輪があり、像からは全面に後光を配し上部に日月をおいている。この日(向かって右)と月(向かって左)こそ、この画像板碑が月待供養の板碑であるとする唯一の証明なのである。阿弥陀像の左足下、線刻蓮弁の脇下に月輪と脇侍である観音の頭部がやや斜め向きで彫られている。このことによって、この板碑が阿弥陀三尊像を表した月待供養板碑であることを物語っていると思うのである。もし、この板碑が完形或いはそれに近く、つ



月待供養五輪塔地輪の銘文
 (中藤堂山採集) 17×21.5×奥行22.5cm



画像阿弥陀三尊板碑
 (真福寺所蔵) 64×34.5cm下欠



大日如来石像
 (神明ヶ谷戸大日堂)



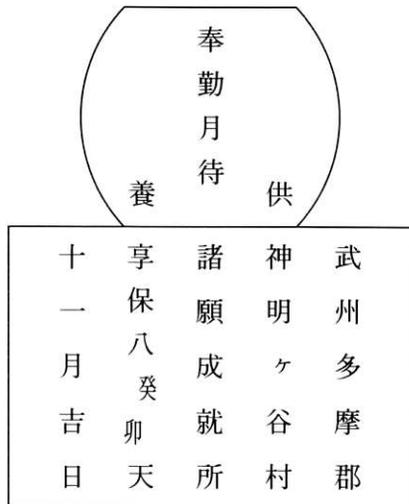
台座の「奉勤月待供養」の
 銘文

まり銘文による造立造塔の趣旨や紀年名がつかめたとすれば、中藤のこの地この村落の中世、それも文明年間前後の民俗信仰がはっきりしてくるのである。さらにこの板碑が、想像をたくましくするだけでも、前記、

中世寛正六年の月待五輪塔に継続する月待信仰の継承が判るというものである。大変貴重なる月待五輪に並ぶ市の重要文化財であるといつて過言ではない。

3 江戸時代の月待供養遺物

中世に2つの文化遺産を残した月待の信仰は次の近世には続けられたのであろうか。この点の立証は大変困難であると思つてきた。ところが、江戸時代も降つて享保8年(1723)に中藤神明ヶ谷村の結衆等が月待供養と同時に諸願成就を祈願して造立したものが神明ヶ谷戸の小山堂に残されていた。これは大きな蓮弁に座する丸彫りの金剛界大日如来石像で、像高は65cmを計る。台座は二段で、次のような銘文が刻まれている。



諸記録、伝承などがないというが、これは明瞭に享保8年に神明ヶ谷村の人々(その人名は石塔の両脇に12名ずつ彫られている結衆)によってまつられたものである。

小山堂は大日如来石像が存することから別名、大日堂とも呼ばれ、小高い台地上に建てられている。この

台地は神明ヶ谷戸の共同墓地になっており、その一角にこの堂がある。その点でこの小山堂(大日堂)は、墓地に据えられた念持堂の観がする小堂である。明治元年9月26日、有名な「百観音騒動芝居」の時、芝居中の田舎役者達が舞台衣装に鬘をつけたまま難を避け、逃げてきた場所がこの小山堂であった。

龍華山真福寺の中藤祥瑞師によると、「本来、月待の供養と仏様とは関係がないと思う。元々小山堂の場所は藤野家のものであった。小山堂には昔、留守居の者が住んでいた。藤野氏の所有地へ神明ヶ谷戸の人々が引墓したのではないか。お堂の地と墓地とは別筆になっている。云々」ということである。確かに墓地は引墓である。小山のようなこの地は古くから聖地、大日如来石像を建てるくらいであるから、村人にとっても大切な場所であったと思われる。中藤師がさらに述べられたように、「この石の大日如来像は露座の石仏の時代が長く続いたようである。その証拠に像も風雪に耐えた痕跡が歴然としており、台石にはどこの路辺の石造物にも見られるお椀形の凹みが沢山ある。」と。この説は正しく、像は長く外にあったようである。享保に建てられた当時から既に外に建てられていたものかどうか。ただ、江戸時代に神明ヶ谷戸の人々によって月待供養の石仏がまつられ、月待の信仰が行われていたことははっきりした。

4 丸山の秋月のこと

狭山八景というのは幕末から明治にかけて、この狭山地方を隈なく歩き、各村々の歴史・民俗・古伝・里語をまとめ「狭山の葉」と題して後世に遺してくれた杉本林志翁が、同書に掲げた狭山の名勝八ヶ所のことである。そのうち3番目に指定したのが「丸山の秋月」である。その全文は次のとおりである。

狭山八景之内 丸山秋月

名所丸山は狐崎ともいひ、狭山南峰の続き龍華山より細長く帯の如く末は広くして神明ヶ谷戸の

家居の後手を通り、東は芋久保に隣り狭山南岑の岬をなす。麓平坦の地より高さ凡十丈余あり。其半腹を青梅街道通じその傍に丸山の井と呼ぶあり、常に水溢れ早魃の折は村人朝夕の用水となす。四季とも水増減せざるは奇といふべし。これと同じ井、山の頂にも一つあり。此の山に藤生ぜざるは如何なる理なるか。伝説に依れば天地開闢の時大多羅法師(虚説なり)藤の蔓にて此山を背負ひ来りしが、此処にて藤蔓切れたるまゝ捨て去りしな

りと。井は当時法師の踏みし足跡なりといふ。笑話のやうなれど記しておく。この丸山の風色格別に、四顧遠山の眺望は云はずもがな、春の蒲公英たんぽぽ葦草すみれの黄紫の色を争ふさまは、やがて逃水の草の野とうつり、雪と見まがふ卯の花も散りて芒の原とぞなるを、照る月の光と共に、壇に詠めうる好個の絶境と讃ふるも過言ならざらん。さらば野にみつる鈴虫の声、子を思ふ雉子きしの叫びなどみな、捨てがたき四季それぞれの趣きを次手ながらものしおくにぞ、心ある遊子一たびは草鞋わらしの緒しめて来らるれば幸なり。武蔵野もここらわたりに押し迫りければなかなか住みなれし吾らまで捨てがたなきまでに哀ふかく覚ゆるまゝ、古人の読み遺したる歌をいさゝかきつらねてやみん。

(原文どおり、漢字は常用漢字を使用)

このあとに武蔵野和歌24首が続くわけであるが、むしろそれより、書の初めに狭山八景を紹介したところに載せた歌を二首記す。

丸山の秋月

まろく見る台うてなに望む月影は

わけて隈なき光はりけり 雲溪

山高く月すみのぼる丸山の

麓の霧のたつもわからず 林志

このどちらが佳とも言えないが、吾人は後の杉本翁

の「山高く」と「月すみのぼる丸山」が、いかにも丸山の秋月を愛で月に惹かれた古人の姿が彷彿として、ほのぼのとした昔の人が眼に映るのである。

この丸山こそ中藤集落の、中世から近世へ、そして形態は全然姿を止めないとしても、その心が伝わる月待信仰の場なのではあるまいか。丸山は狭山之葉の名文どおり、狭山丘陵のうち南の峰、真福寺の山より支脈が東方に延びた、神明ヶ谷戸集落を包んだ丘陵のことである。名文は岬をなすと表現したように、確かに突出した岬のように連なっているのが丸山で、土地の人は「向山」とも呼んでいる。それは内中藤(谷ッや鍛冶ヶ谷戸の集落)から見ると向かいの山だからである。「名所丸山は狐崎ともいひ」とあるが、近代では狐崎の地名はまったく消滅してしまって聞かない。その狐崎が戦後、有名な大多羅法師の足跡の井戸を含めた東端あたりまで土地開発の大波を受けてきれいに平坦地にされてしまった。自然破壊による名所の損爛せんらんでなくて何であろうか。

中世あるいはそれ以前から始まり、近世(解釈しだいで現在)まで行われてきている月待の信仰、その舞台がこの丸山なのである。太古大多羅法師の清泉水を飲んだ人も、丸山の中央辺の山上に古墳時代の土師はじの甕を遺した人も皆、丸山の秋月、四季の月を愛でて生活したのである。そして、核心はあの寛正6年銘の



武蔵村山における月待信仰関係図(縮尺1/5,000)

月待供養五輪塔を建てた人々や月待（と思われる）画像板碑をこの地に建てた人々が集会し、信仰し、祈願して安らぎの生活をしてきた舞台がこの丸山であったといつてよいと思う。丸山の頂きに一結衆が、おそらくそれほど豊かな生活でも安穩な社会でもない暮らし向きの中で、なお余裕を見出し、石造物を築いて自分達の力で月待供養をしたという事実だけで吾人は自ずと感動の念を禁じ得ないのである。

古老から前記の（月待）画像板碑の発掘についての経緯を聞いたことがあった。若い20代の時のことであった。それは、今では夢のような話となってしまったが、丸山の北側、のちの青梅街道（大正時代までは丸山の南麓を東西に走るのが本道）沿いの鍛冶ヶ谷戸で、こ

5 狭山丘陵をとりまく諸地域の月待遺物

武蔵村山市域においては以上のような月待信仰の遺物が確認されたことになるが、近郷、近在の諸地域での模様はどうであろうか。ここ武蔵村山市域の中藤丸山（現在では堂山と呼び慣らしているが）での単独の月待信仰の存在を立証できたとしても、広く狭山丘陵の周辺での同時代の傾向について調査しておく必要はあろう。そこで、過去または最近知るところの模様を二三記録しておきたい。

隣町の瑞穂町に禅宗の円福寺がある。箱根ヶ崎に古く江戸時代以前からある寺である。この寺に収蔵されているのが長禄4年(1460)の五輪塔である。これも中藤と同様、地輪のみの現存でその他は完全に亡失し、目下見ることができない。磨滅損傷は中藤以上で、辛うじて「長禄四年」は読める。しかし、**3**の右側が数字文字不明で月日の辺りが「八月」と読める程度である。

6 まとめ

月待供養がどのように行われたものであるか、また、その信仰の実態や背景、それにまつわる伝承等々、今後に残された課題は大きいと思う。それだけに調査や見聞、探訪、検証と楽しみはふくらむ一方である。それについても武蔵村山市の中藤地区に、今年から数えて529年前、寛正6年2月に祖先達が二十三夜の月の

の街道と並行して流れる川がある。この川の水は入りの田圃から谷ッの田圃を潤し、大橋から芋窪へと流れていく。その川の普請の時、出現したというのであった。長いことこの伝承を大切にしてきたが、その根拠はやはり月待と丸山と中世月待供養五輪塔との関連性を探ることにあった。さらに、真福寺の月待板碑を調査するうちに、この板碑が下半分を欠いているため、その欠損部がありはしないかと、**おぼろげ**ながらかつての伝承をもとに、何度か実地を歩いたことがある。しかし、この調査は徒労に終わった。続いて、下半分にあたる板碑が、村山地方或いは近郷で出土していないか、余計な調査を試みたがこれまた無駄であった。

この五輪塔地輪を簡単即決に月待供養塔とするのはどうかと思うが、後証を待つとして現段階では中藤のものとの類似点からその可能性を指摘しておく。また、月待板碑として旧二本木村六部塚にあった「天文十一年(1542)壬刀 奉月待供養 本願平内五郎 彦三郎 彦七 六郎次郎」と銘のあるものが知られている（現瑞穂町郷土資料館保管）。

狭山丘陵の裏側、所沢市では市指定文化財の月待供養十三仏板碑がある。市内北野の北田氏蔵で「月待供養 文明二年(1470)庚寅十一月廿三日」の銘と14名の結衆人名が彫られている。人名はすべて農民らしく、武士、僧侶等の名は見当たらない。高さが136cmと大板碑に属するもので、民俗信仰を知る上でも大変参考になる。以上のほかにも幾つかの石造物等の資料があると思うが、知名の資料のみに止めた。

出を丸山の空に見上げた景色を想うとき、500年後の丸山で二十三夜の月の出を見たくもなるのである。因みに、平成6年の旧暦2月23日は新暦の4月3日の日曜日で月齢は21.8、月の出は0時28分と新聞記事にあった。春の二十三夜月の模様は来年を待つほかはない。

（平成6年6月23日夜記す）